

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	序
Sub Title	
Author	堀江, 湛(Horie, Fukashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.1 (1988. 1) ,p.5- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	生田正輝教授退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19880128-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

生田先生は昨昭和六二年三月、御定年まで一年を残し、選択定年の制度によって慶應義塾大学を御退職になった。実は先生はこれに先立って既に四年間にわたり、慶應義塾転籍規定による出向で、新設常磐大学の人間科学部の学部長の職にあられた。約束の四年間がたち、昨年三月、同大学は最初の卒業生を送り出したが、同大学の強い要請もあって、手塩にかけて育て上げられたこの大学に引き続き止まられ、同大学の研究教育に専念されることになったわけである。

今から八年程前、水戸市で常磐学園を経営し、法学部にも講師として出講されている諸澤英道教授から、同学園に短期大学に加えて新たにユニークな四年制大学を設立したいとの御相談を受けた。ちょうどその頃、慶應義塾では必要に応じて他大学や研究機関に専任として出向し、その任務が終了すれば慶應義塾の旧職に復帰するという転籍の制度が取り決められた。諸澤教授との御相談を重ね、新設大学は社会学、心理学、教育学を統合する人間関係学科とマスコミ、情報科学等を中心とするコミュニケーション学科の二学科からなる人間科学部として発足することとなったが、この転籍規定により斯界の第一人者である生田先生が同学部の初代学部長に就任されることとなったのである。

常磐大学は新設わずか五年の大学であるが、新聞学、マス・コミュニケーション科学の領域で早くも専門研究者のあいだで誰知らぬ者のない大学に成長し、学会において確固たる地位を占めるに至った。これはひとえに生田先生を

中心として、同大学の創設に馳せ参じたマスコミ学界の指導的学者や新進の野心的研究者の協力の所産である。その上、同大学は六三年四月、新たに組織管理学科を増設してさらに一段の発展をみることとなった。

もう三十年も前の話である。私事にわたり恐縮であるが、私がちょうど大学院の修士課程を終えて、法学部の副手に採用されたときに、法学部の教授会は私に博士課程に進学し、それまで学部、大学院を通じて指導を受けてきた中村菊男教授にかえて、米山桂三教授の指導を受けることを命じた。生田先生はこの米山教授の一番弟子であった。米山先生は鋭い、先見性豊かな学者であったが、厳しい、しかもいささか気まぐれな先生でもあった。そのもとにあって、米山先生の信頼厚い生田先生は新参の私にとって誠に心強い存在であった。私はまた大学院で生田先生の最初の講義を拝聴した。先生の御退職によって、最早私が教室で教えを受けた先生はおられなくなった。私にとっても感無量である。私の古い卒業アルバムを繰ってみると、学部の専任教員の最後に最年少の助教として石川塾長と生田先生の童顔の写真が載っている。歳月の早さを感じないわけにはいかない。

生田先生の御専門はマス・コミュニケーション論である。戦後急速に発展したこの学問分野において、先生は中心的役割を果たしてこられた。先生は新聞学会会長、ついで情報通信学会の常任理事も務められたが、先生の研究の発展がすなわちマス・コミュニケーション研究の発展であったといっても過言ではないほどである。

しかし先生の慶應義塾での御生活の中で逸することのできないのは大学紛争とのかかわりである。昭和四四年大学紛争の最中、佐藤朔塾長のもとで生田先生は常任理事の職に就かれた。前任の永沢塾長の時代に引き続き、先生の常任理事としての四年間は終始大学紛争に明け暮れた。義塾はその中において学問の府として、研究教育機関の責任と見識を護り通した。この点における先生の功績は大きい。某日、幻の門の前で先生は一団の活動家の学生に拉致され、第一校舎の教室に監禁された。偶々学部の対策委員であった私は、先生の救出の任にあたったが、研究棟地下室の本部での塾当局との緊迫したやり取りや、年少の同僚たちとの救出作業の光景が今でも昨日のように脳裏に浮かん

でくる。

最近では定年を迎えられる先生方が実に若々しく見える。しかしその中でも生田先生は更に一段とお若く活動的であられる。常磐大学では慶應義塾における先生の同僚や先生の育てられた多くの若い後進の弟子たちが、先生に協力して大学作りに精をだしている。どうか先生にはあの屈託のない笑顔をいつまでも絶やされることなく、同僚、後進の先頭に立って、この新しい大学に魂を注入し、小粒ではあるがピリットしたユニークな大学に育て上げて頂きたいと思うこと切である。

昭和六三年一月

法学部長 堀江 湛